
[嘘予告] 【F a t e / 7 R I D E R S】

yanagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「嘘予告」 【Fate / 7RIDERS】

【Nコード】

N7988R

【作者名】

yanagi

【あらすじ】

正真正銘嘘予告です。思いつきのねたです。チラシの裏に書きなぐったような出来です。流し読みが吉です。

それが何時から存在しているのかは誰も知らない。もしかしたら、この世界と同時に誕生したのかもしれない。

だが、それは今から始まる物語にとつてはどうでもいいことだった。全くもってどうでもいいことだった。ようは、そこが現実世界とは違う世界であり、数多く存在するといわれている平行世界の一つではないというだけで充分だろう。そして大事なことは、その世界の特性として現実世界に存在する全てのものが反転して存在しているということと、ヒトの代わりに異形の怪物が住み着いていることだろう。

その世界の名を『ミラーワールド』という。

神崎士郎は魔術師である。

以前、彼が開発したカードデッキを使用し、ライダーバトルと呼ばれる一種のバトルロイヤルを行った。目的はただ一つ。最愛の妹に新たな命を与えるために。

そのライダーバトルの概要を簡単に述べると仮面ライダーと呼ばれる十三人が、最後の1人になるまで、互いに戦いあわなければならない。それが、仮面ライダーたちの宿命。仮面ライダーが最後の1人になったとき、その望みがかなえられるという。

だが彼の願いが叶えられることは無かった。ライダーバトルが失敗したのではない。最愛の妹である優衣に新しい命を拒否されたのだ。他人を犠牲にしてまで生きたくはないと。

彼は絶望に打ちひしがれた。それでも諦めることはできなかった。まだ手段は残されていたからだ。

元々、ライダーバトルはあるものをお手本にして創られたものであり、その効果はオリジナルと比べると遜色はするが、必要充分なものであった。

必要以上の力は総じて害悪にしかない。だからこそ、彼はカードデッキを開発したのだ。

そして、彼は当然の帰結としてオリジナルに参加することを決心した。

冬木市という地方都市で『聖杯戦争』が行われる。

それは聖杯と言う、なんでも願いを叶える願望機を巡って、七人の魔術師と、七騎のサーヴァントが殺しあうという、儀式である。

そして、それはライダーバトルによく似ていた。それも当然である。神崎士郎は聖杯戦争をお手本としたのだから。

だがしかし、今回の聖杯戦争は前回までの聖杯戦争と違っていた。

「アーチャー、これがなんだか分かるの？」

遠坂凜は、赤い弓の刻まれた得体の知れないカードデッキを手で弄びながら訊ねた。それは、アーチャーの召還とほぼ同時に鏡の中から飛び出てきたものだった。強い魔力をそれから感じる事が出来るので、何らかの魔術具であることは確かなのだが、凜はそれ

がどのようなものであるか予測がつかなかった。

「それはアドベントカードと呼ばれるカードのデッキだ」

「アドベント？ どうしてそこでアドベントが出てくるのよ？」

どうみてもそれがカレンダーに見えることは無く、何故、教会の降臨節が出てくるのかも分からない。

「綴りは同じだが、そのアドベントカードではない」

「そうなの。それで、これをどうすればいいの？」

「CONTRACT（契約）のカードを出してくれ。デッキからアドベントカードを引き抜く瞬間に、君の意思によってカードの種類が決まる」

「……………」

凜はアーチャーの言った通りにデッキからカードを引き抜いた。そのカードはCONTRACT（契約）のカードだった。

「ふん。それで」

カードに落としていた視線をアーチャーに向けると、カードによる効果なのか、アーチャーの姿が揺らぎカードの中に吸い込まれた。

「なっ！」

思わず声を上げた。それは凜の把握する聖杯戦争の知識にない事

柄である。

（凜、『変身』と唱えるのだ）

脳裏にアーチャーの声が聞こえた。

「どついうことよ！」

『訳は後で詳しく説明する。今は、それを体験したほうがいい』

シニカルな物言いのアーチャーの言葉に、むっとしながらも凜は言うとおりに『変身』と呟く。

そして、赤色の騎士 仮面ライダーへと文字通り『変身』した。

「神崎士郎 『鏡界の魔術師』か」

言峰綺礼は今回の聖杯戦争に新たなルールを加えた犯人である神崎士郎を知っていた。

言峰は以前、魔術協会に属していたときに神崎士郎の存在を知った。

神崎士郎は封印指定の魔術師だったからだ。

その技は道具に自身の魔術である固有結界を組み込むことにより、異世界と世界を繋げることであった。そして、その技術はかの魔導元帥、キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグが使用するといわれている万華鏡に告示しており、その為封印指定されたのである。

封印指定の魔術師がそうであるように、神崎士郎もまた行方をくらましていた。

魔術師狩りを主とする武闘派の魔術師が彼の行方を追っても誰一人として、彼を見つけたものは居なかった。それは、言峰の知り合いであるバゼットも一時期彼を搜索したが見つけることは出来なかった。

その彼が、どこで知ったのか不明だが、聖杯戦争に関わってきた。それもどういう手段を用いたのかは不明だが聖杯戦争のルールさえ変化させるほどに。

重大な問題ではあった。本来、聖杯戦争の監督者である言峰が座していていい問題ではなかった。それでも彼はそれに対する何らかのアクションに移ることはなかった。

綺礼はイレギュラーたる神崎士郎の存在をあまり問題視しては居なかったのだ。イレギュラーと言えば、そもそも言峰は八人目のサーヴァントというイレギュラーを隠しているのだから文句を言える立場ではない。

ふと、言峰はステンドグラスを見上げた。

一瞬、ステンドグラスの鏡面が波立つ。

言峰の表情がわずかに歪む。

聖杯戦争を変化させた犯人である鏡界の魔術師 神崎士郎の来訪である。

衛宮士郎は正義の味方に夢見ていた。憧れていた。

正すべき不正があり、解決すべき問題があり、助けるべき被害者がいて、正義を下すべき悪人がいる。

そんな単純明快な正義の味方に憧れていた。そう成りたいと常々おmoi、実際にそうなるうと努力していた。

だからこそ今現在、目の前で展開されている地獄と同義な阿鼻叫喚の惨状を放っておくことなんて出来なかった。

その惨状を一言で表すなら、人が襲われている。それも暴漢や猛獣

などではない。漫画やアニメなどでみるような異形の怪物。

嘘みたいな現実の状況であり、頬をつねれば確かな痛みを感じるだろう。

怪物は突如として鏡や硝子から出現し、その場に居合わせた人々に襲い掛かった。

突然のことであり、あまりにも現実離れた出来事に人々は最適な行動に移ることができなかった。また場所が新都にある歓楽街の駅前パークであり、三連休の初日だったことから多くの客が訪れていたこともこの惨状を生み出すことになる大きな要因だった。

人々はその状況を正確には理解することが出来なかったが、危険であるということとを本能的に感じ取ると、出口へと殺到した。

混乱が起きる。それは怪物にとって好機であり、怪物たちは我先にと獲物である人間へと襲い掛かった。

それが今現在の状況であり、人を咀嚼する不快な音が方々か洩れ響く。

そして、その場に居合わせた士郎自身も無論例外ではなく、その怪物に襲われていた。

士郎は怪物を相手にするにははなはだ頼りないモップを奇跡的に成功した魔術により強化させ、それで防いでいた。

それでも防戦するのが精一杯であり、細かい傷は数え切れないほど負い、頼みの綱のモップは、いくら強化されているといっても強度など高が知れているので、いまにも折れそうであった。

士郎は血が滲むほど唇を噛んだ。

悔しかった。どうしようもなく悔しかった。

自分に助ける力が無く、自分自身さえ護ることも出来そうもない。正義の味方に成る。そう決めたはずなのに、容赦なく現実がそれを否定する。

「
！」

三メートルほど前方に小学校低学年ぐらいだろう年齢の少女に、蜘蛛の姿に似た怪物が襲いかかろうとしていた。

少女は恐怖に歪めた顔を真っ直ぐに怪物に向け、見つめていた。身体が震えている。恐怖によるものだろう。

士郎は考えるよりも先に身体が少女の元に動いていた。そして、少女に覆いかぶさるように抱きしめていた。

死ぬな。

頭のどこかでそう確信していた。それでも不思議と恐怖は感じなかった。

ただこの少女が助かるのなら構わない。

そうおもう自分がいた。

あの日、衛宮切嗣に助けられた衛宮士郎は、その日、一人の名前も知れない少女を助ける代わりに命を失うはずであった。

だが衛宮士郎は運命に出会った。

強い閃光が、鏡のように磨かれたショーウィンドウの中から発せられた。そして、閃光が消えぬうちに、ズシンと言う重量のある物が地面に落ちた轟音が震動と共に生じ、砂埃を舞い上げる。

士郎は我が眼を疑った。

銀の鎧に身を包んだ自分よりも小さい少女がその手に持つ不釣り合いな剣で、大蟹の鋏を切り落としたのだ。

否が応にも視線は少女に釘付けになった。

一瞬の静寂の後、場違いなほど澄み切った少女の声が響く。

「問おう。貴方が、私のマスターか？」

教会からの帰り道。

何時の間にか上空は雲ひとつ無いほどに晴れ渡り、夜空には数多

くの星々と巨大な月が煌々と輝いている。

月の光を背に浴び、それから大きく長い影法師が伸びる。

「こんばんはおにいちゃん。こうして会うのは二度目だね」

無邪気さが箆っている幼い声が周囲に響く。

異形のものと共に、人形を思わせる少女の二人組み。

間違いなくあの異形はサーヴァントであり、故に少女がマスターの一人であるのに間違いなかった。

「バーサーカー？」

士郎の隣に居た凜が漏らす。

「驚いた。単純な能力ならセイバー以上じゃない、アレ」

凜の言うとおり、アレは化け物だ。

アレから受ける威圧感、重圧感は並みじゃない。今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。それでも、

「衛宮くん。逃げるか戦うかは貴方の自由よ。……けど、出来るなら何とか逃げなさい」

凜は言う。一人前とはほど遠い士郎がこの場に居ても邪魔にはなろうが役には立たないだろう。せめて逃走を選んだほうが生き残る確率が高まる。

凜の心遣いを悟り、士郎はギリと歯をかみ締める。

正直、遠坂の言うとおりに逃げたほうがいいのはわかる。だけど、逃げるわけにはいかない！

わなわなと震える手は、自然とカードデッキへと伸び、士郎は凜

と供にカードデッキを構える。

「「変身！」」

そうして二人は青と赤の騎士に『変身』した。
興味深げに少女は二人の様子を見ていた。

「変身はすんだ？　なら、始めちゃっていい？」

軽やかな笑い声を上げ、少女は場違いなことにスカートの裾をつまんでお辞儀した。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォ
ン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン」

身に覚えがあるのか、リンは呟く。
そんな凜の反応を気に入ったのか、イリヤは嬉しそうに笑みをこ
ぼし、鈴が転がるような声で、

「変身」

と言った。

それまでイリヤの背後に聳えるように存在していた巖は消え。
純白のライダーがそれに代わり姿を現す。
姿は変わっても、その力は寸分と変わらず。むしろ、強力になった
かのように大気がソレに怯えるように震える。

「じゃあ、殺すね。バイバイ！」

歌うように、イリヤは死刑を宣告する。

新都の高層ビルの屋上。

翼の羽ばたく音が静謐な夜の静寂を破る。

只でさえ高い場所の、さらに上空には白い天馬に跨る影が一つ。
ライダーの仮面ライダーである間桐慎二が、剣を構えるセイバー
の仮面ライダーである士郎を睨みつける。

戦闘の激しさを思わせる細かい傷が体中に数限りなく出来てはいるが、決定的な致命傷は今だ両者ともがない。

戦闘は既に終盤。勝負の神は終わりのときを今か今かと待ち構えている。

そして、両者は図ったかのように同じカードを召還機にセットした。

「「ファイナルベント！」」

紫の仮面ライダーの駆りし天馬は遙かなる上空を駆け上がり、その身体を光の矢と変え己が標的へ向け奔る。

「ヘルレフォン
騎英の手綱！」

青の仮面ライダーの周囲に嵐が舞い起こる。それと同時に黄金の刀身が光り輝き、進む。そして、光が収束し一条の光線を生み出した。

「約束された勝利の剣！」
エクスカリバー

青の仮面ライダーと、紫の仮面ライダーの渾身の一撃同士がぶつかり合う。

柳洞寺の地下に存在する大空洞。そこには大聖杯が出現し、勝利者を待ち望んでいた。

「どうした、この程度か？ 君の正義というものは？」

最後にして最強のライダーである、仮面ライダーオーデインが金色の不死鳥 ゴルトフェニックスを従え士郎を見下ろす。

「くっ、負けるわけにはいかないんだ！ 俺は、この戦争を終わらすって決めたんだ！」

脳裏には死んでいった白い少女 イリヤスフィール・フォン・アインツベルン の顔が浮かぶ。

イリヤは士郎を庇い、アインツベルンの森にある城で金色の英雄王に殺された。最期、死に際に笑みを浮かべ、士郎に言ったのだ。

『こんな戦いは終わりにして』 と。

だからこそ、士郎は戦い続けた。

こんな馬鹿げた争いを止めさせるために、あの赤い弓兵に負けなために。

その為にここまで来た。

「いいだろう。これで終わりだ」

オーディンはデッキからカードを引き出し、錫杖型の召還機、ゴルドバイザーにセットした。

士郎も、ほぼ同時にデッキからカードを引き出し、剣型の召還機、エクスカリバーにセットした。

そして、二人の声が重なりあった。

「「ファイナルベント！」」

集いしは七人の魔術師と七騎のサーヴァント。

目指すは満願成就を約束する願望機『聖杯』。

七人と七騎のうち生き残るのはただ一人と一騎のみ。

汝、己が望みのために 戦え。

【Fate / 7 RIDERS】

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.
.
.
?
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7988r/>

[嘘予告]【Fate / 7RIDERS】

2011年4月18日06時02分発行